

花房 直三郎 はなぶさ なおさぶろう (1857～1921)

MENU

■ 最長不倒の統計局長！

【エピソード】原敬の日記に登場した花房直三郎！

第1回国勢調査記念絵はがき



岡山藩士花房端連（まさつら）の三子として、安政4年（1857年）、岡山に生まれる。明治元年（1868年）、藩に抜擢され、東京に留学。和漢の学を研鑽するとともにドイツ語を学ぶ。明治12年、東京外語学校のドイツ語教員、明治15年農商務省御用掛となり書記局及び庶務局に勤務。同年統計課兼勤を経て明治16年太政官御用掛。明治17年から4年間、外務省勤務。その間同省の雇ドイツ人から法律経済及び統計学を深く研鑽。明治21年、枢密院書記官に転じ、同院議長伊藤博文の参謀となり、憲法制定の事務などに参画。明治25年、第二次伊藤内閣における総理秘書官を経て、明治30年内閣書記官として統計課長、翌31年内閣統計局が置かれ、局長に。明治41年、法学博士に。明治43年国勢調査準備委員会において、当局として国勢調査の制度設計（勅令、予算案等の策定）を行う。大正5年（1916年）に退官。同年、内閣統計局顧問として、大正7年臨時国勢調査局参与として、第1回国勢調査の準備に当たった。

【参考資料】「故法学博士花房直三郎君小傳」（『統計集誌』第483号所収）、【写真】「岡山市史 第5」（国立国会図書館デジタルコレクション）、【絵はがき】筆者所蔵

最長不倒の統計局長！

1 在任期間が歴代最長の統計局長

花房直三郎の統計局長としての在任期間（明治31年^{1898年}11月1日～大正5年^{1916年}4月10日）は、18年にわたり、歴代統計局長で最長です。

2 花房直三郎の統計局長在任中の功績

花房直三郎の統計局長在任中の功績としては、内務省から移管された人口動態の調査に新たな方法（中央集査）を導入し、我が国の人口動態統計の精度向上に貢献するとともに、国勢調査ニ関スル法律の制定に向けた働きかけ、国勢調査の集計機の開発、国勢調査施行令（勅令）の策定を始めとする大正9年（1920年）の第1回国勢調査の準備などが挙げられます。

内閣統計局における花房直三郎の足跡は、その在任期間の年表をみることにより把握することができます（【別表】参照）。

3 原敬との縁¹

原敬と花房直三郎の接点を知るには。まず、原敬と渡辺洪基²の盟友関係を知る必要があります。

原敬と渡辺洪基の盟友関係は、明治12年（1879年）に「郵便報知新聞社」に入社して記者となった原敬が取材活動として、自由民権運動に反対する伊藤博文の指示で『集会条例』の作成に携わる役人の渡辺洪基に接近し、渡辺洪基の話を聞くうちに意気投合したことにより始まります。原敬は、明治13年に渡辺洪基が参加する東京統計協会の会員となりました。その後、明治14年に、渡辺洪基は、原敬と花房直三郎とともに、諸国巡遊を行い、地方の実情を視察しました。ちなみに、花房直三郎の兄花房義質³は、外務省で渡辺洪基の一年先輩で、その縁で、渡辺洪基、原敬と花房直三郎の三人の接点ができたとみられます。

¹【参考資料】：総務省統計局HP「統計の黎明とその歴史」（統計の偉人たち＞原敬）、島村史郎「日本統計史群像」（原敬）、国立公文書館デジタルアーカイブ（「従三位勲二等渡辺洪基叙勲ノ件」、「枢密院高等官転免履歴書 大正ノ一（花房義質）」）

²渡辺 洪基（わたなべこうき）：弘化4年（1847年）生まれ。明治3年外務省出仕、19年東京府知事、20年帝国大学総長、25年衆議院議員、30年貴族院議員。東京統計協会会長（明治13～14年、15年～23年、30年～34年）（【参考資料】『統計集誌』第243号（プロフィール）、明治30年12月24日付け官報（貴族院議員となった年次））

³花房 義質（はなぶさ よしもと）：天保13年（1842年）生まれ。岡山藩士花房端連の長男。緒方洪庵に学ぶ。欧米を視察し、帰国後、明治2年（1869年）外務省の創立により外務大録となり、5年外務大丞に累進。その間清国、朝鮮に差遣され、日清修好条規締結交渉や、朝鮮国との修交交渉にあたる。以後、公使として朝鮮、ロシアとの外交に従事。20年農商務次官、21年宮中顧問官、24年宮内次官、44年枢密顧問官を歴任。大正元年（1912年）日本赤十字社長となる。子爵。（【参考資料】国立国会図書館HP「近代日本人の肖像」、東京統計協会会長（明治23年～30年）（【参考資料】『日本統計協会年譜』）

諸国巡遊の内容は、海内周遊日記（原敬著）⁴として、郵便報知新聞に連載されました。連載に際してのあいさつ文で、原敬は、渡辺洪基から周遊への同伴の誘いを受け、そうこうしている間に花房直三郎も周遊に同伴することになった旨が記されています。

4 我が国の国勢調査の創始の原動力になった花房直三郎とその人間関係

諸国巡遊ののちに、渡辺洪基は東京統計協会会長として、外交官時代の原敬にフランス人口センサスの調査を依頼するとともに国勢調査の実現に向けた要請行動を展開し、花房直三郎は内閣統計局長として国勢調査の準備を行い、原敬は首相時代に第1回国勢調査を実施し、同調査の実施に際し国勢院を創設（花房は国勢院の参与に）するとともに、同調査の実施の直後に中央統計委員会を設置するなど、統計整備に向けた取組を実施しました。この三人の関係も我が国の国勢調査の創始の原動力になったと確信しました。

【エピソード】原敬の日記に登場した花房直三郎！

前述のとおり、明治14年（1881年）に、花房直三郎（当時24歳）は、原敬（当時25歳、新聞記者時代）、渡辺洪基（当時34歳）とともに、諸国巡遊を行い、地方の実情を視察（明治14年5月23日から10月2日まで）しました。

島村史郎「日本統計史群像」で、原敬の日記（前掲の海内周遊日記）における花房直三郎とのエピソードが2件紹介されており、当該日記を確認したところ、それ以外にも、明治14年と明治30年に、花房直三郎に関する記事があったので、ここに紹介します（島村が前掲書で紹介の2件を含む）。

【明治14年】（諸国巡遊時）

6月10日

須賀川駅を出て行くこと数十町にして国道を辞し左折して久留米開墾地を過ぎ、開成山に^{いた}抵り某亭に宿す。花房直三郎氏先づ在り。初め吾輩の東京を^{いた}発するや君不幸病に罹り遂に^{とも}俱に^{つが}発するを得ず、因て此地に会せんことを約せしが、今来て会約の如し。因りて各^{つが}恙なきを祝して小酌す。

6月11日

後藤氏に伴ひ熱海駅に至り某店に宿す。此温泉ありと雖も^{おわい}汚穢浴す可らず。渡辺花房二君は工場に至りて尋常の湯に入浴したり。

6月18日

米沢に滞留す。…余去つて奥羽新報社を^{とぶら}訪ふ。目賀田信順、大野薫の二君氏、余を某樓に伴ひ更に渡辺花房の二君を招き瀬下秀俊君も亦来会ありて餐せらる。快談数時各^{とぶら}飲を^{とぶら}畫して辞去せり。

6月24日

梵字川より最上川に入り、午後になって酒田に達す。…最上川の河口に一望せり。…既にして（そうこうしている間に）渡辺花房の二君は旅寓に帰る。余は両羽新報社を^{とぶら}訪ふて森藤右衛門君に面晤し頃刻にして旅舎に帰る。

6月28日

雨を冒して下院内の旅宿を^{いた}発し上院内より右折して行くこと里余、院内銀山に^{いた}抵り、…銀山の状況を聞く。余採鉱と現場及び目今工事中なる…疏水道を見んと欲し、渡辺君と^{とも}俱に…坑内に入ること四、五丁、^{たちま}ち、直立四十余尺の階あり、皆な灯を胸間に懸け、挙て上下す…。

既にして鉱山分局を辞し某亭に^{いた}抵りて午餐す。花房君病起り分局の警官に依頼して其薬受く。…銀山を去り下院内駅に還る。花房君の病未だ癒ず。因て、再び昨夜の旅亭に投宿す。

6月29日

下院内を^{いた}発し行くこと里余、横堀村に至り花房君病後のために歩車を買って先づ^{いた}発す。吾輩徒歩にて行く。

7月8日

黄昏に水無駅に達し亭に宿す。…夜中中村方義君来訪せり、同君は同行している花房君の従兄なり。

7月9日

（阿仁鉱山の）工場及び新坑道を観る。既にして、…新道より一山を^{こへ}踰て萱草石炭坑を観る。試掘中なり。…此地にて鉱山分局の馬二頭を送らる。渡辺花房二君騎して去る。…渡辺、花房二君先づ在り。遂に晚餐の餐を受く。…花房君留まり宿す。

7月22日

朝招魂社に赴き官軍の墓^{墓所}を^{いた}観る。花房君岡山人なれば共藩人の戦死者を^{いた}弔せんが為めなり。福原利平なる

⁴ 海内周遊日記：原敬全集上巻に所収（国立国会図書館デジタルコレクション（※国立国会図書館／図書館送信参加館限定）で閲覧可能）。

人は当時岡山藩士の賄方をせし人にて爾来今日に至るまで共藩人の墓処を看護する由を聞き、**花房君**と共に赴きとぶら訪へり、誠に奇特の人なり。

8月28日

渋民を経て盛岡に至る、盛岡は、余の郷里なり、よって直ちに、わが茅屋に着せり。渡辺**花房**二君は六日街齋藤某に寓せり。夜二君来訪あり。數更にして(數時間談談後)其寓に帰らる。

8月29、30日

二十九、三十日の両日盛岡に滞留…。

三十日の夜は、渡辺、**花房**二君と共に県令しまこれきよ嶋惟精氏の招きに応じ、其邸に赴き遂に渡辺君の旅寓に宿せり。

9月5日

小泉に至らざる里余にて巡回の査官(巡查)に同道…。余**花房**君と共に(渡辺君少し後れたれば)途中稍々やや倦あぐんで殆ど談話も絶へたる時に恰あたくも好し(都合よく)、査官の同行せられたるあり。

9月22日 (花房を「親友」と表現)

今市の旅宿を発して日光に抵いたり鉢石町小西某に宿す。是より廿九日に至るまで日光に寓せり。…

同行の親友**花房**君微恙びよう(体調不良)あり、偶々たまたま日光に出張せる軍医…に來診を請たりしが、左までの事にあらずとて帰られたり。因て人をして薬を求めしめしに薬袋と共

に一書を附せられて曰く、往診料五圓薬価一圓云々と、驚かざるを欲するも得べけんや。聞く氏は今春医学部を卒業せし人なりと。若し医学部出身の醫師は皆な、此くの如き診察料を収めらるゝものならんには、余輩貧人は死すとも其薬を仰ぐ能はざるべし、呵々かか(大声で笑うさま)。

9月30日

日光を發して今市に抵いたる、**花房**君は東京來遊の諸氏と共に東京に分袖して東京に向て帰らる。余、渡辺君と俱ともに栃木に向て発し板橋を経て鹿沼に至り宿す。

参考【明治30年】(陸奥宗光逝去時)

8月24日

陸奥伯こうきよ薨去せり…。

余の始めて陸奥伯を見たるは、明治十四年、渡辺洪基、**花房直三郎**と共に東北漫遊中宮城の獄舎に於てせり。当時伯は、禁獄中にて同所の獄にあり…。

【あとがき】花房直三郎は、後に首相となる原敬と諸国を周遊し、第二次伊藤内閣において総理秘書官を勤めていたことなどが分かり、…調べれば調べるほど…驚きの連続でした。特に、明治14年9月22日の原敬の日記(海内周遊日記)において、花房を「親友」と表現していることも、筆者にとって新たな発見でした。また、冒頭の第一回国勢調査の記念絵はがきにおける花房の「国勢調査ハ政海ノ航路標識ナリ」は、国勢調査の社会的利益を端的に表現した名言であると思いました。筆者は犬養毅「政海の灯台」も想起しました…。

【別表】

	組織・統計調査その他の統計事業	関連事項
明治28年 (1895)	12月 スイスのベルンで万国統計協会の会議が開催され、「各国が1900年に人口センサスを行う議決」がなされ、その後、内閣統計課に、人口センサス実施の勧告書簡が届く	日清戦争(明治27年8月～明治28年4月まで)
明治29年	3月 東京統計協会が総理大臣に「民勢大調査の実施」を建議する 3月 統計学社・東京統計協会が貴族院・衆議院の議長に明治33年民勢調査の実施の嘆願書を提出 3月 衆議院で江原素六議員らによる国勢調査執行建議案が可決、貴族院で船越衛議員らによる国勢調査建議案が可決	
明治30年	2月 花房直三郎、内閣書記官(内閣統計課長)に	3月 貴族院、「統計事務拡充ニ関スル建議」を行う 3月 日本銀行、東京卸売物価指数(明治20年1月基準)の公表を開始
明治31年	11月 内閣統計課は内閣統計局となる(花房直三郎、初代統計局長に)	6月 第1次大隈内閣発足 6月 戸籍制度に基づく人口統計事務が内務省から移管される 11月 諸外国における人口センサスの状況を調査するため、米のほか英、仏、独に呉文聰を派遣
明治32年	1月 内閣統計局が、毎年「人口動態調査」を始める 12月 内務省令を改正し、市制、町村制でいう人口は、内閣統計局で調査し官報を以て報告する最近の人口によるものとする	7月 東京統計協会、統計学社共同での府県その他から講習生を募集し、統計実務家養成のための統計講習会を7月11日から9月20日まで開催する(明治39年までに6回)
明治33年		
明治34年		
明治35年	2月 第16回帝国議会に議員立法として衆議院議員内藤守三らが「国勢調査ニ関スル法律案」提出 3月 「国勢調査ニ関スル法律案」が衆議院と貴族院の可決を経て成立 12月 「国勢調査ニ関スル法律」公布 12月 第1回生命表を作成	
明治36年		12月 内務省は明治37年1月以降、毎月の市区における出生、死亡、死産の男女別数を道府県に報告させる
明治37年		2月 日露戦争(明治38年9月まで)
明治38年	2月 「国勢調査ニ関スル法律」が改正される。(第1回調査の時期は別途、勅令で定めることになり、明治38年国勢調査は日露戦争の影響で延期されることになった)	
明治39年	1月 逓信省に作成依頼した電気統計機械が完成(川口式電気集計機)	
明治40年	3月 貴族院、国勢調査施行準備ニ関スル建議を行う 5月 麻布庁舎(麻布富士見町元内務省痘苗製造所)に移転を完了する	
明治41年		
明治42年		
明治43年	5月 内閣に国勢調査準備委員会を置く(委員会は大正2年6月廃止)	8月 日韓併合条約が調印される
明治44年	8月 内務省、東京市で細民調査を行い統計局で集計する(以後大正元年7月(東京・大阪)、11年1月前年実施(東京)分についても行う)	
明治45年	0	4月 新学期から使用の高等小学読本第3巻に初めて「統計」という一課が入る

	組織・統計調査その他の統計事業	関連事項
大正元年 (1912)	12月 「維新以降帝国統計材料彙纂 第1輯～第4輯」を刊行(翌年3月までに)	
大正2年		
大正3年		4月 大隈重信、政界に復帰し再び総理大臣に(第2次大隈内閣:大正5年10月まで) 7月 第1次世界大戦(大正7年11月まで)
大正4年	3月 道府県人口統計主任者会議を開催する(統計局主催の道府県統計主任者会議の始め、翌年から地方統計主任協議会、昭和4年から地方統計課長会議と改称)	
大正5年	4月 花房直三郎、内閣統計局長辞職、内閣統計局顧問に	5月 「統計の進歩改善に関する件」(内閣訓令) 発出 5月 内閣統計局展覧会を開催

(参考)

	組織・統計調査その他の統計事業	関連事項
大正6年		3月 東京統計協会が、総理大臣(寺内)、内務大臣(後藤)、大蔵大臣(勝田)に、国勢調査の実施に関する建議書を提出
大正7年	5月 内閣に、臨時国勢調査局(調査部・製表部・庶務部)と国勢調査評議会が設置される(大正10年3月廃止)(花房直三郎、臨時国勢調査局参与に) 9月 国勢調査施行令(勅令)公布(第1回国勢調査の実施は大正9年10月1日と定まる) 逓信省に川口式電気集計機の改良を依頼	9月 原敬、総理大臣となる(大正10年まで)
【エピソード】花房直三郎、スペイン風邪に罹患し、新聞記事に！ 速水融・小嶋美代子「大正デモクラシー 歴史人口学で見た狭間の時代」によれば、「国勢調査実施に目処がつき一安心した大正七年の日本にスペイン・インフルエンザが襲来し、…花房直三郎も罹患し、大正七年一月一八日の読売新聞には…記事が掲載されている」とあり、新宿区立戸山図書館でヨミダス歴史館を利用し、当該記事のコピーを入手しました。記事の概要は、「花房直三郎博士は…流行性感冒に罹り…昨今神経衰弱を併発し…六十二歳の高齢の事とて…家人は憂慮しつつあり」とされていました。幸い、回復し、翌年の内閣統計講習会において講師を勤め、臨時国勢調査局や国勢院の参与として活躍しました。		
大正8年	7月 内閣統計講習会を開催する(以後毎年、昭和12年第19回まで)	6月 ベルサイユ条約調印
大正9年	5月 統計局と軍需局とを併せて内閣に国勢院が置かれ、統計局はその第一部に(花房直三郎、国勢院参与に) 10月 第1回国勢調査実施 10月 内閣に中央統計委員会が置かれる	1月 国際連盟発足
大正10年	2月 統計職員養成所開設 3月 臨時国勢調査局が廃止され、その事務及び職員は国勢院第一部に引き継がれる 4月 花房直三郎、永眠 11月 「統計時報」創刊(昭和15年6月第96号まで刊行)	12月 大正2年及び8年末の我が国の国富を推計し「戦前戦後における国富統計」として刊行 3月 農商務省、農家経済調査を開始 11月 日本銀行、労働統計調査を開始